



明
所
卷



和蘭醫話序

漢國のひととけいん其奴隸たる朝鮮國を微

發明も得ざらんかたきつうもあまらず吾

皇國といふ中古来醫ふ役事せりしがづれり

人も素難ゆえに痛著るる冊套加充棟敷

千萬よありしなり余や年々ちぢりてはじめて

医書と讀み驚く後説ゆ信じて其愚惑し

欺るる今ふ三十年所一日杉玄白氏が解



和蘭醫話序

杉玄白氏

體新書と因し、後宇明卿氏が内科撰要あり、
 槻子煥氏が著書とよみ、はして其論説の新
 奇なるふを異し、大小辨ひと及し、爾れり
 され、西洋の諸醫典と譯せるもの數本と因し、頗
 其大抵を知り、同好の士と戮餘の屍と剝し、諸
 大數十品と解臍して、内景と研精とる、西洋書
 説奇し、さやぞの差と、郷小漢人内景の説、後述
 もの忽然と醒覺し、一時は奮習と脱とる、ゆと得

そり、愉快し、るが、三先生の偉功豈教せといや
 殺系漢人竹物どかくも歴垂其不習と傳る、命曾子此罪
 人なご、其臍府とつる、目親し、視たる、経絡
 と説く、手自解とたる、声と吠て、空く、瀉する、臍
 臍物と、謝在抗あり、面土愧ざらんや、顧小
 傷寒論の一書、論此不及、臍絡より、唯其
 直は視聽とるものとして、脈動と繫、諸疾と治とる、實事
 のこと、その故、及せ、其佗金畧中藏肘后千

余外其室より下臬許徐王孫滑諸張李朱の書に至るまで此
 臟絡謬誤と淘汰せんと思ふも太任早は後世余意と同くせん
 人と俟つ今や塾生の問は答話と筆記せると上木せんと請
 けり余 詎拒やんば話のどれぞく人ありて取るこころと疾醫の
 道はより大に興起も志て人刮目これと期瑣々細々の小木石東海と
 填めんが余 特にこれが精衛ささむらふ

享和三年癸亥歲

和泉 萬町 伏屋素狄識

目次

- 心の臟の話
- 診脈の話 附 瀉血の話
- 神経の話
- 眼の肝臟小關からぬ話
- 耳の鼓膜の話
- 腎臟精汁ととどろむ話
- 精囊の話

卵巢らんそうの話

膀胱出納ぼうそうしゅつにゅうの話し話

轉脬てんぽうの話

膽たんの用ようの話し話

附つ黃疸わうたんの話

大機たいき俚兒りゐの話

健胃劑けんいざいの話

蟲腸ちゅうちやうの話

下卷 目次

筋すぢの話

猶林九臯ゆうりんくわうの聽き話

諸器しよきの話

藥製やくせいの話

藥品やくひん彼此ひたひた有無いうむの話

附地つち五方ごほう差さひの話し話

胃中燥尿いちゆうそうにと辯べんするの話し話

針灸しんしう穴處けつちの話

西洋せいようの説せつ贅ぜい學がく歟やの話し話

開臟かいざう諸書しよしょの話し話

華佗剖心の話 附ケルツルイキの話

阿仙薬の話

半夏厚樸湯の話

漢國の人醫才云くの話

くさぐさ 雑話

仲景氏よ拘泥する話の話

和蘭醫話目録 畢

凡例

横周池高道等我 琴政先生よ問へとも先生詳らるる答へ

らりし話と筆記 たるもの許多しり醫話をもつて書の名と及此

和蘭醫話も其中のひひりたりるふかハ頗漢語ふ近しきものあり

先生嘗てしるハ筆記俗文の類はくきて讀み易く解しやすたと

簡要とせよとあはれよ小字等命と奉りて俗耳目にいそやとれは

強きそれ由る記中何れととを等遍り重複したるはくしこと

冗長なるもの看る人煩雜をばしとて除くは且和蘭医話より

事これ血能集る處の會所役同き動脈も平常に動さる
 血の通る管は心乃腕より血を出して諸絡を廻す其廻り終
 然又乃至る細き管乃端より又それよりその端又端より
 は一と脈あはせざる細き管へ心乃腕は此管の通る筋を血脈と
 申は是ハ動脈ハ遠く動さる此管乃裏面ハ處々辨りあはる
 あり心乃腕運り血を収る處は格より心乃腕を以て格の
 細き處より此管ハ心乃腕と細き處ハ辨りあはる處あり
 事一又此おも動け理もゆあり度事ハ動脈ハ格終動さる
 事一又此おも動け理もゆあり度事ハ動脈ハ格終動さる
 腕の初とあり其初とあり此寸口のあり處でも同じく動さる

尤同ド血の通る筋な寸口と天澤とみて動の小差ハ
 大抵ハ同じ事ハ熱の表裏より差く事惟もさる事ハ
 心腕一身の至寧あり意識動作これよりさるなるハ其動かん
 意より静なりと欲し静なりと意を揮たりと道理あり人ハ
 いの格に静なりと欲し静なりと意を揮たりと道理あり人ハ
 以るも志より動ハ天地の氣ハ應ず事ハ一邪氣さき目これ
 を平常の如き事ハ變る事ハ
 漢人の心乃管は用か意の事ハ係し心乃腕ハ人軀の中心ハ
 中心ハ心乃管と心乃腕と事ハ係し心乃腕ハ人軀の中心ハ
 中心ハ心乃管と心乃腕と事ハ係し心乃腕ハ人軀の中心ハ

かを論せし唯胸乃部位を指したる也俗より寸も胸の寸は人又
寸もあし人たといひ皆流しむけし寸も寸を非と稱し俗を寸の寸
診脈の語

診脈の語

一 扁鵲垣の一方を視て盡く五脈癥結を尋る特は診脈を以て名とす
るのこ世史の文より之を以て格の術西洋にも之を以て

左格の右者流の如き事一切承り以て漢にも僧智縁易思蘭休咎を脈
の太素脈を以て日者の事ありて醫に承る處より之を傳へ此太素脈一
法あり吾國の寸口を以て之を以て寸口脈と稱し他日此傳へる中
にハ脈を診する事が即垣の一方を視るなりと云ふべし脈を診する
事特は垣の一方を視る事と以て名とすは非邪垣ハ寸口の寸口脈

於膜を幕といふが如きといふは外より候がはく其病むく其を志
るなりと云ふ西洋にも寸口のありて脈動を候する事あり其色
外候ありて察する事ありて之をカールツ書名ありて乃人の名に
血脈を腕より約し察してそれより諸病を瘡とありて蘭人も稱
於容なりとありて此腕肘寸口尺澤を三指を以て候し病を察す
其事は傷寒論中より所乃法脈乃事を入格しく考へて之を以て
強造の套語めのである慣の語を以て格に注意ありて其聲色脈動漢
も良醫の名ありて人を輕忽せざる慎しむ大切に候したる事其
通より西洋を血乃動如何を候診して熱乃度量を察す人乃生氣あり
るもいづべし脈を死生の大關係なりと云ふ

液を洩らし棄るの法之 じぶ土水地あるは海辺よこばいり痛まひ
 ばいとそ地乃方言にこひ尸厥急肩かぬ格のそのはひけ痛の甚なり時
 其あつた土人小刀はらうと唇の裏面をほを破つと血を吐しねひ
 よ一紙花の醫百平井道長よは西洋の法に似たりた事なりとも肉唇
 乃血はらうひよひ舌下の筋ある血脈を刺して血をらうと如すた
 西洋浮血法甚佳しと深き法も慢りに浮血せしめあつた血の量を
 る痛乃軽重に依り量あつと味せしめ法滅の義なき
 ありくりあつても長くおれりひを思ふに追て其奥を竭つると肺乃
 事代お徳りひ序に浮血の事お波及びりて郭右陶が沙張玉衡書か
 乃針法もあつた事よ且彼書二篇中予指の後もさくひ名依りた棄

書よこひ追てこ入一読此書に限る近世の漢人著作の醫書おめを
 るに取る右よりすく予指の論評もさくひ追てこ入一読此書
 何乃血あつて浮血致しひりたを人よこひにさくひを治してこ入一
 食の精もよれ各用をるとおとたり其あつたは合宜かすこれを敗
 液にりこれ血井に交しといろと痛を醸しはらゆとこれを血の通
 候は後あつて浮血して西物とらう棄るひと血はらうとこ入一読此書
 良血と外側廻るあつたは血をさくひも良血はらひあつた西物の
 方多く浮血するひこれらも敗血のあつたは精良のおよめたりれ
 個の疾病を念ふとらう其餘とこれ唯れとらう血をさくひも良血はらひ
 人よ浮血と事あつた肥人の血を瘠人へ移し瘠人を肥さめ血をさくひ

先移方の事み候

眼乃肝臓み察めぬ候

一 眼目を肝の臓に係る事法を以て後述する故のこれなり

あゝゝゝと云ひ

其後原僕人み出たるは漢人こそ其の中級を以て是の中後感
牽強せし物なり今眼目材格を記するに胆腑の中より今其
乃らざる所とこそ是れ肝の臓腎の臓二細筋を係り察する
歟と云ふ事肝の白處を肺と云ふ五臓を以てはありて肝臓を以て
ほとの証候なり知る事肝臓を以ては其の証候はありて其の
洋人経験するに十日経てははやく傳へる事 吾國の事なり

い「西洋も類のありて陰道に達するの経ありて後めありて
偏いさきまを以てありて其の似たりと云ふ事肝臓を以ては其の
遠いかにありても後めありて其の似たりと云ふ事肝臓を以ては其の
二美觀の事のこり入ぬ

耳の鼓膜の話

一 耳の腎に關する事後述も改む事其の因又耳の中を以て入る
ハ股の才も入りて事其の事比々いひあるが如いの事なり
あれ又眼の肝臓に係るといふと同後め一絶例乃種々ありて耳
ハ此のありて凡例を以て是れ其の事なり其の事なり其の事なり
を以て是れ其の事なり其の事なり其の事なり其の事なり其の事なり

漢人著書中腎係官能の多う欺きぬれ要んあべととれ腎
 虚乃るをよひさば小水不利と申事忽論と申るあべと腎中
 腐敗と申事と西洋の腎痛といふ金田君腎着病といふの腰の
 あつと重いと事千錢を帯ぶといふ此腎着の名腎系丸の症と同
 く水をさうとせたるものとさゆ二病とも伏苓を以て水氣を驅せ西
 洋の伏苓を用ふる事ありとて惜む蘭の三ツギとて人腎を
 考ふと昔の通年と別よりいふ事あり書にんより其人其人
 能くしるものも補劑も買ひてとてしたるも也。後彼土の官醫と申
 するも一と渠とて伏苓の効能を試験せし其化 我きとほるとく
 く用ふる事枚もの中彼土の書記とてさる數十種あり彼土も追々用て

驗ある事枚あつば大に其効能たるを補とてんべと 純中伏苓其性
 鎮重かるあつと俗より掌中をせと持重ある質あり能く降
 して其能水事を吸ひ引くゆゑあつと申して水ありは密に和
 入を試ても其効とてかく乃とて水事吹合且稟質鎮墜あり速に
 下降せし利の切あり宜なるゆゑ一葉性賦の是理を信とて試
 ぶ乃能を研究せよとて其効能の事、後日實話つり今日伏苓一葉
 を液とて二隔を及ぶとてその効能ありとてなるゆゑ

精囊結語

一 腎ハ小水の源會所たる事篤く承申候精汁乃醸してす

ハ試むも又あそく作

卵巢 能話

一 卵巢より夫婦人ぬれありて其卵が人と成るるの作より男精の
より中をさすの用をさぬぬ作

男精母血能事種人種と毆金復しては下も一定論もなき作屍を解
能一葉葉よととあせりて其甚精しく書能るるは思お作が下し
世卵巣より女又固りの物ありて子宮の上も又位下あり其於容ハ
解作新書たぬれ出ると通してさひ世より成居れ親らにさ南大葉
能のどく又熱くさるるのハ赤豆ぐぐわの物左ちと大小十二もささ
後又ハ二十より四十もある中作卵をさぬるゆゆ急果の名あり卵右の

どくちひされあたるも其と皮又後又血絡も具つあつはと皮胞衣となる
この事也果乃下通より人乃丸痕の如と左ちもあつは丸痕の処新
さそれより卵あつは丸痕乃人乃丸の処卵の感と物と口と事ハ男事情
感と付精け子宮口(射入る其氣子宮)喇叭後付て卵巣と向
通して付女子も情感と付彼熱くさるるの卵右の別け同く感と轉ハ
出これが喇叭の端又在花又と卵の指をさすハ(卵の)後の中は後
通して子宮(初)のころは之竹通(筋)赤小豆を通してさるるは又ハ
志多んあこれに小豆(子宮)使入り左右もに同くはあ子宮内ハ死
能るに左右に散れ能るも子宮の中ハ樹と蟄豆一個を容るる
能るの大ささ女卵納るの後より子宮口閉塞し卵ハ母の乳血を吸

是をやまひたて成るに胎はるる宮も胎もみ接ぐゆゑに胎は胎を二も
 まる世々々彼より宮衝逆の胎をば胎の卵の外皮胞衣となすも胎を二
 龍衣乃膜あり

乃を産する八月九月の胎は胎を大に太る言に胎向月産するも胎を二小
 さくたる。月産る膜裂け子宮口開くたる産る常ありやまひた
 りぬたうとて産人も五 國人も産母の初産の乳汁毒なるも胎を二
 世毒とつる言の即ち胎ありあき産逆の切巧なる生児胎中より乳毒ありや
 しまも腸中より敗液穢物あり世母の毒乳を吞き其穢物汁を吐
 下とさるるわろ穢西のおは下へ流るの比を毒の精乳汁も生児をわらま
 世産逆の切ありとてわろく自己の胎をわらま天竺の作劑を流る毒つ

をいむる言はありや胎なる一條其ありを流る胎のこや
 後より中へ一層よりありわらま天機を流らぬをともありあり

膀胱出納上下もにありは

膀胱ハ下はあり上は無きといひ小便ハ大小腸圍門より泌別
 ちり膀胱へ流る人とも事法を二偏下奉り上は出るも
 くられは流せざるはありぬるやわらま

其は下の古賢いある古賢ハ内田系の本よみするては甘き古賢
 ともいふ言はる言はる世言餘り遍激はとも其をともは其内田系
 能論後ハ殿る事ともありとありは人とも素難本副創の事

といふあまがを南は信芳の事試聖人の言み素ら一人身を屠る事不
 仁かるといふに托して固未だそのを空論と事多し作素難よりその内
 景皆外より察しき臆況の也古聖と云も皮外より内系を摸索し
 桂を事ハなぬ事決定也まゝ生れあす鳥死をあらんと宣と未達と故と
 掌とを宣ひ一本又も古聖人あゝぬるいふあゝぬるめしと此れ事
 かくしそれを意あもせしむるに一方より洞視とこと古史家の
 文華譬諭とを多強し解の意大とあゝぬるの感もつゆは其に仁
 といふといふ副利せぬたゞ素難の述者ハ名仁の魁首といはれしを
 解後とるに仁といひて生れし人の操勝をもせぬといふ事とあゝぬ
 る疾病を瘡とるに仁かるといふ事とあゝぬらるるに仁は操勝をも通の儀と

仁の端ももたれ下といふ思ふに仁は穢物とてなくといふ其は憎ら
 るゝや痘を喰ふハ姑措く注きの痛人清浄をんは注きの痛をさう物
 きとていふん乳あまといふ酸膏といふもの嫌厭の意あはれ地躰と措大と老
 魚ハ以角の儀後と事思ひいふや多し事思ふもの思ひ又度
 人も官を得と貴人ふも教むらるるハ世業かろ毒入る良相也此す毒入
 トヤ後復と馳らるる吁〇過言ハ層とて飲食胃といふ胃の細口ハつゆ
 もつゆと腸を通し其腸太くすす細長と武大五といふ人もあゝぬる
 腸ハ腸膜附着し其膜紙わらるる腸とあゝぬる腸膜の膜の細くもい
 蓮葉の細紋のいふれ本百源通とては流るる糸のいふれ細くもいふ其

口問友自話

并

多膀胱中を測りて其の量を知る

膀胱用ある後 附黄疽の括 大キリールの括

一 膽の用をなすものハ新書も古書も同仕ひある人ハ膽ハ母胎ニある

あひだも用をたし 落血ハ血を盡後乃そのわづとハいづき又去

たがひてハいづ

膽の母胎より用をなす事新書も古書も同仕ひある人ハ膽ハ母胎ニある

胃の下口ハ十二指腸とト起り中ハ膽の裏に入りて腸をひく

作て腸を捲く絞る事ハ膽汁世後ハもの竅より出る事明くハいづき又去

食物を消化する大用の汁も此汁血中ハ敗交してハハ黄疽黄病

乃此ハ其の事試して之を情しむハ黄病膽汁より出る事明くハいづき又去

胆も通じしを其胆の裏の肉を有る右傍の胆の裏病ハ冠ニ腐けく

疝ハ胆病カ事を示さるおたしハ疝の字時乃山を有る疝の字後ハ

イ蒲もさる事ハ同着たる疝も有るハ胆汁を消化して

るんつけて究理しし事ハ熊膽其外諸獸膽腹痛を治す事原朱腹

痛と申ハ腸痛ハ腸の中ニ消化せぬ食れ又ハ燥屎腸の裏を拒てハ

ハ腸も着案ハある種緊要ハ痛ハ胆汁の運用甲斐

かつたれよみけつ又あつて獸類の膽の氣を假して彼塊物を消化せしめ
 巴神經の緊もゆるりて痛ハ愈り事と云ハ此中胆性發後發大苦味を
 するもの故あき成最しする事と云ハ野猪膀胱も然膽も亞ごて小効あ
 る事と云ハ胆膀胱導も其理會てよみけつ食塊ももせよ燥屎ももせ
 よ膽汁能く消化せしむの切あつて云ハ○蜜導の事惟ももあつては法よ
 以ても食塩をかゝ加へてハ蜜の固まり宜能くそれよも容を肛門へ
 射しよも其を造り竹ももも容易と造らさく
射蜜若ハホイ止とりよ それよも射あむ方捷経よ
 惟大黃芒硝はト之法煎け右の思あも射あもハハ虫腸よもよ上
 へ射しよも速速へ到り効を成と事調り湯茶を飲もも同し理よ
 てハ何なりとも其茶能くを擇り水試
此法西洋ヨカリスニ 湯と水とを候腸とハ候なり

○坐茶と婦人臍中へ茶紙納るる法仲景氏も以爲り西洋もも此坐
 茶種々年一是ハ瓜蒂乾粉もよと吐き出すの及も下へ吐き出す事
 と云是あもよ下へ吐き出すハハ吐き出す事と云思もよ下も
 沈沼さとの水を下へぬく候俗も水をさるる水を吐き出す同く云も
 云れよも浮腫法乃理をりて○膽汁と大キリイル汁とお命し
 食を消化せしむる事法其候書中よもよも然るに先年一擲を解律せし
 又此會もも処多もよも十二指腸中とこの方又膽汁を沃くた胆の發
 せしめそれよも一すは許下もの方又キリイル汁を沃く竅あるを親よも
 多も十二指腸中へ相會せしめりおの異格又以用を成とを同トも也
 あり候置と取容もも小差あり物もよも以教多獸類を其候一親よも

